
まさかの出来事

月食猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの出来事

【Nコード】

N86030

【作者名】

月食猫

【あらすじ】

寝坊して焦る刹那は、何故か迷子を保護。そしてさらに厄介事が…。

「なんでだドチクショー!!」
叫びながらも駆け抜けます。

（前書き）

ノリと勢いで書いたもので、楽しんでいただけたら幸いです!!

「せつちゃん遅いね」

「しかも電話もメールも反応なし…もしかしてなんか事件に巻き込まれてたりして？」

「流石にそれは無いでしょ」

「だよー」

その日、彼女達の親友である東雲刹那が今現在進行形で遅刻している。ちなみに今は3時限目。しかも学校にも友人たちにもなんの連絡もないままだ。

まあ、彼女達は大して心配していなかったりする。どうせもう少ししたら息を切らしてやつてくるか、もしくは家で半死人状態で連絡どころではないかの両極端だろうと思っていたからだ。

しかし、刹那にとっては今現在進行形で笑えない状況に陥っていたりする。

時間はさかのぼり、刹那は40分の寝坊をした為に全速力で自転車をこいでいた。これだと、一時間目にギリギリ間に合うが朝のSHLには間に合わないという状態だ。

しかしこんな時に限って何故かケータイが落ちてしまった。結構良い速度が出ていた上に、ポケットからなので結構大きな音がした。ガシャン！！

「ああ！！チクショウなんでこんな時に限って落ちやがるんだ！！」
自転車をタイヤ痕を残しながら停止させ、結構後ろの方に落ちて
いるケータイをとりに行った。自転車ごと戻るのには面倒だったので、
駆け足で今来た道に戻る。

ちなみに、この話の主人公である彼女は文化部所属だがかなり足が速い。ついでに男勝りな性格をしているので口と足が同時に出るおてんば娘である。しかもペタンコなので髪が長くなければ女装した男に見える位だ。

「うつせえ黙れっ！！今俺はいらついてんだよ！！」

地の文にツツコミしないでください。…とりあえず、彼女はケータイを拾いに行った。しかし、この時の彼女は焦っていたために周りがあまり見えていない様な状況だった。

しゃがんでケータイを拾うまでは良かった。しかし、立ちあがろうとした時にスカートの裾が引つ張られた。そして振り向くと、そこには良いとこの坊っちゃんのような格好をした5歳児が、眼に涙をためた状態で彼女のスカートの裾を掴んでいた。

思いつきり面倒事の気配満々であるが、口は悪いが根はやさしい彼女は思わず問いかけた。

「……オイ坊主、お前なんで一人なんだ？親はどうした？」

今にも泣きそうな顔で子供は首を横に振った。迷子確定だ。ある意味ガキ大将のような位置にいた事もある彼女も、この子は見た事がない。つまり地元の子ではない。つまり、完全に迷子確定。

（チクシヨウなんでよりも寄ってこんな時に迷子確保しちまったんだ俺！！アレか？日ごろの行いが悪いって言うのかよ）

内心の愚痴を全て溜息に変え、気持ちを切り替える。どうせここで会ったのも何かの縁。それに遅刻はもう確定しているし、勉強よりもこつちの方が気分が良い。要するにサボりの理由にした。

「良いだろこれは善行なんだからよー」

「お姉ちゃん、誰に突っ込んでるの？」

刹那さん、お願いですから地の文にツツコミを入れないで下さい。はたから見たら大きな独り言を言うイタイ子です。

今彼女がいる所から一番近い交番は1キロほど先にあり、このあ

たりに迷子の親はいないし家もないとのことなので、とりあえず迷子を交番に届ける事にした。

自転車に戻り、幸い前のカゴが大きいタイプだったのでそこに迷子を乗せる。さあ出発しようと思った時、近くにあった空き缶がなんの前触れもなく弾けた。…ついでに、銃声っぽい音もした。

さらに近くに転がってきた空き缶には、見事に穴が開いていた。
「マジ？」

マジです。さらにダメ押しと言わんばかりに、いかにも裏稼業者です的なオーラを放っている黒服の男性一行が、これまた黒い車に乗って登場。

「…僕、あの人達から逃げてきたの」

「そう言う事は先に言ってくれえ!!」

迷子からのカミングアウトに、彼女は思わず叫んだ。どうやら、迷子になったのは誘拐犯から逃げたせいらしい。イコール面倒事を通り越して事件です。うっかり命の危険です。

「オイ小娘!! そのガキ渡してくれるんなら見逃してやるぜ」

いくら男勝りな彼女でも、流石に飛び道具がある状態だと随分と厳しいモノがある。少しだけ、心が揺れたが、ふと後ろを振り向くと迷子と目が合った。縋るようなその目に、彼女は決心し口を開く。
「誰がテメエら薄汚ねえヤロー共に、こんな無力なチビ助渡すかってんだ!! 味噌汁で顔洗って一昨日きやがれってんだクソツタレどもが!!」

そして彼女は自転車を全力で漕ぎ出す。自分と迷子の命がかかっているため、さつきより必死だ。所謂火事場の馬鹿力を発動させているような状態だ。

まさか女の子があんな不良みたいな啖呵を切るとは思わなかったのか、黒服達は茫然とした。しかし、彼女が一つ目の角を曲がるときに我に戻り追いかけ始めた。

そして今、自転車はパンクしてしまったので、彼女は迷子を抱え

て走っている。

「オイ坊主！！アイツらまだ追って来てるか！？」

「ウン！けど、さつきより減ってきてるよ！！」

「そうか！！」

迷子を小脇に抱え、昔遊んだ時に見つけた道とも言えない様な道を全力で走っている。今はとある住宅地の塀の上を猫のように走っている。ちなみにさつき知り合いのおばあさんに見つかって笑われた。

さつさと交番に駆け込めればいいのだが、交番付近には黒服達が見張っているため突破は難しい。うっかりすると蜂の巣だ。

警察に連絡出来ればよかったのだが、彼女のケータイは最初に落とした時に結構強くぶつけたらしく、液晶が真っ暗だ。これは買えないといけない。もちろん迷子が持っている訳もないし、公衆電話は時間がない。かと言って知り合いを巻き込む訳にもいかない。詰まる所八方ふさがりだ。

しかしそろそろ走り続けるのにも限界が来ている。と言うより、文化部所属のくせに5歳児抱えて3時間近く走り続けられたという所が凄い。しかも抜け道獣道道路を縦横無尽だ。ほとんど休憩らしい休憩は無いも同然。どんな体力しているんだろうか。

「お姉ちゃん！！あつちに学校があるよ！！」

「！！しまった忘れてた！！」

彼女は自身の通う高校までの最短かつ人目につきにくい場所を頭に浮かべ、再び速度を上げた。

4時限目の古文は、ぼそぼそと喋る先生と睡魔に負けて沈没した何人かの生徒と言うごくありふれた風景を作りだしていた。しかし、その平穩を蹴り飛ばさんばかりに勢い良く教室のドアが開けられた。まあ、足音が段々と迫って着ていたのだが、それすら走ると言うより地面に蹴りを入れて感じる感じの音だったとある少年は後に語っ

た。

「すいません遅刻しましたついでに面倒事もやってきたぜドチクシヨウ」

ドアを再起不能にせんばかりの勢いで開けたのは、東雲刹那その人だった。小脇に抱えられた子供は辛うじて目を回していなかったが、それでも状況がよく分からないのかしきりにクエスチョンマークを浮かべているようだった。

「…せっちゃん、とうとう犯罪に「アホかこれはただ保護しただけだバカヤロー」だよー…」

彼女の友人である丸山香奈の冗談をバツサリと切り捨て、今にもネチネチとお説教をしようとしている古文の先生を偶然を装って気絶させた彼女は、ところどころ怪我をしていた。子供が無傷だったのは、彼女の上着にくるまれていたからだ。

「せっちゃん、どうしたのそれ」

「遅刻しそうになってとばしてたらケータイ落としてお釈迦になってついでにこの坊主拾って黒服に飛び道具込みでリアル鬼ごっこする羽目になって警察いけねえからここに駆け込んだ」

ワンプレスでそう言いきった彼女は、息切れし怪我をしていたが、仁王立ちしたその姿は力強く、その目は強い光を放っていた。うつかり気弱な人が拝みそうな勢いだったと、友人Aは言った。

「全校に伝える。ケンカ祭り開催ってな！！」

あまりにも堂々と言うものだから、クラスにいた人達はそれぞれ伝令として駆け去った。そこに残ったのは、うっかり別世界を覗き見している古文の先生と刹那と子供と秋穂と香奈だけだった。

「…ねえ、お姉ちゃん。大丈夫なの？」

「ああ、安心しな」

「と言うか、入学してから二度目のケンカ祭りの主催者があんなになるとは思わなかったわ」

呆れた様に言う秋穂に、苦笑を浮かべつつも頷いている香奈。全く状況がつかめない子供は、刹那に窓の外を見る様に言われた。

そして、そこにあつたのは校庭で黒服の男たちを相手に、怯むどころか逆に闘志を燃やしている学生たちによる戦場だった。しかも、黒服達はすでにボロボロだった。

「実はね、この高校ってお祭り騒ぎが大好きなの。それで、ケンカ祭りってのはうちの高校オリジナルの臨時イベントで、敵対する集団とか、鬱憤がたまつてて危ない時とかに誰かが開始を叫ぶと始まる」

「まあ、バトルロワイヤル状態で、元気が有り余つてゐる連中は嬉々として暴れるの。暴れたくない人達は校舎内にいれば問題ないのよ」
「つまり、早い話がお前はもう安全だってことさ」

こうして、第二回ケンカ祭りは生徒の勝利で幕を引き、黒服達は全身骨折でそのまま警察病院へと搬送され、子供も無事親元へ帰る事が出来た。

そして、後に彼女が保護した子供が実はとある大企業の跡取り息子だと知らされクラス中がフリーズする事は、まだ誰も知らない

（後書き）

とりあえず、へたくそなモノですみません。誰か私に文才をください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8603o/>

まさかの出来事

2010年11月11日23時35分発行